

出島蘭館医カスパル・シャムベルゲルについて

ミヒエル・ヴォルフガング

彼に因んで名付けられた「カスパル流外科」の父として、Caspar Schamberger は日本の医学史上もっとも著名な人物に属し、出島商館長の日記によると、一六四九年から一六五一年頃日本に滞在している。一六五〇年に Andries Frisius の使節とともに江戸へ赴き、そこで約十か月外科を教え、患者の治療にあたった。多大な報酬を得て長崎へもどり、まもなく次の江戸参府にも加わった。彼の「弟子」やその著作もよく知られている。しかし、日本滞在前後のことについてはほとんどわかっていない。彼の正確な名前についてさえさまざまな記述が見られる。

日本関係の当時のドイツの文献を読んでいて、私は偶然彼の経歴についての手掛かりを得た。自由帝国都市 Nürnberg の学者 Christian Arnold は、その論文集「二大王国、日本とシャムについて」(一六六三年)のために、もとの平戸商館長 François Caron の記述を薬剤師 Johann Jacob Mercklein に翻訳させた。Mercklein はドイツの Winshelm 出身で、一六四四年から一六五三年まで東インド商会の船医(理髪師)として働き、一六五一年の夏、出島で数か月を過ごし、Schamberger を知った。彼は翻訳だけでなく、自分でも旅行日記を書き、Arnold はこれを上述の論文集に加えたが、その際 Arnold にさまざまな助言もしている。Arnold は一六七三年この著書にさらに加筆し、「三大王国日本、シャム、

朝鮮について」を著した。Arnold がそれぞれの文献に加えた膨大な脚注に、次のような記述がある。

「日本では外科医（ほとんどが東インドにやってきたドイツ人）はとくに人望がある。日本人が彼らが必要とするときは、自分の町に連れて行った。そこへは他の人々は（どんなに望んでも）行くことも、その地を垣間見ることも許されなかった。たとえば、Mercklein 氏が日本にいた時、長崎の貴族がピッチで足を火傷し、オランダ人に外科医を要請した。その時選ばれた医師 (Oberbarbire) は他の医師のために便宜を計り、傷は一人で治療できるような性質のものではないと称して、毎日もうひとりの医師を伴った。その後、外科医とその助手 (Unterbarbire) は二人の Benjois と通事に伴われることになった。彼らは治療後、帰途、特別に毎回少し先の通りまで連れて行ってもらえるようになった。しかし Mercklein 氏は、遠くからでは寺院の美しい建物や墓地以外にも見えなかったし、そこへ行くことも許されなかった。こうしてオランダ人外科医は、治療後、日本人から多大な贈り物を与えられた。Casp. Schamberger 氏 (現在は Leipzig の大商人) も当時それにあずかった一人である。つまり四人の武士、または Benjois が骨折りに対する贈り物を台、または Palakin に乗せて、彼のもとに公式に持参した。日本人は生来華美で、人に見られることを好むのである。それは絹の服、Sackie と呼ばれる日本のワイン、さらに長円形の金貨であった。この金貨はしかし、(残念ながら) 国外へ持ち出すことはできず、彼らの貨幣制度に従って銀に換えなければならなかった。」(Arnold 一六七三年、三四三頁)

Arnold は Mercklein から Schamberger の帰国後の滞在地とその身分を知った。実際にこれは Leipzig 市の文書保管局での研究によって確認された。一六三九年から一六八二年の戸籍簿 (八九頁) によると、「商人 Caspar Schamberger は Leipzig 生まれだが、その父は Caspar の誕生後に市民権を得ており」、彼自身は一六五八年十一月八日に市民権を取

得している。Schamberger の父は「Königsberg の商人 Balthasar Schamberger」で一六二四年八月十三日に市民権を得た。(戸籍簿一六一二～一六六六年、九六頁)したがって Caspar Schamberger は一六二四年に Leipzig で生まれたのである。彼が日本に来たのは二十五歳頃だったことになる。Leipzig の文書保管局には一六五八年の市民権取得以外の記録も残っている。Schamberger はおそらく多くのヨーロッパ人のように、裕福になって東インドから帰国し、社会的にそれほど評価されていなかった外科医 (Barbier) としての仕事を辞め、今度は商人になった。しかし市民階級への復帰は容易ではなかったようだ。彼の名前が現れる一六六九年から九八年の記録のほとんどには争議が記されている。これらの文献は全部で一三〇ページになる。Schamberger は、埋葬記録によると一七〇六年四月四日、Leipzig の Grimmische Gasse で没している。享年八十三歳、莫大な遺産をめぐる争いは、記録によると一七五〇年まで続いている。

(九州大学言語文化部)